

JICA Training Program

北陸での「研修員受入事業」

JICAでは、開発途上国から様々な分野の研修員を受け入れ、自国で活用できる情報や技術を学ぶ場を提供しています。ここ北陸では、地元の大学やNPO団体、自治体の協力を得て、北陸の特性を生かした、地元密着型の研修を実施しています。新たに実施された2つの研修コースを紹介します。

観光開発

Tourism Training



2011年2月18日 富山国際大学でスタートした、平成22年度国別研修「仏語圏アフリカ 持続可能な観光開発」コース開講式の様子。真剣にメモを取る研修員たち

今回この研修では、この点に焦点を当てます。北陸地方の特性を生かした観光開発例、例えば氷見の水産業による町おこし、福井のコシヒカリブランド立ち上げの歴史、世界遺産に登録された五箇山合掌集落など、地域に根ざした観光開発事例を学んでもらいます。また、観光資源活用手法など観光開発に必要な理論も学びます。より気軽にアフリカ観光を楽しめる日も近いかも。

アフリカにおいて産業としての観光は有望視されています。しかし、観光資源は有するものの、地域住民、地域産業を巻き込んだ地域に裨益する観光は十分に開発されていません。

一方、日本では地域の特性を生かした観光開発が民間会社、地方自治体、地域住民の連携により実施されており、地域振興において重要な役割を果たしています。このノウハウは今後、アフリカにおいて観光開発を通じた地域振興の一助になるものと考えられます。(4)



氷見はとむぎ生産組合では地元の特産物をブランド化する取り組みを学びました。工場で行われている作業も体験

里山イニシアティブ

昨年11月石川県において里山イニシアティブの推進をテーマにした研修を石川県や金沢大学などのご協力を得て実施しました。アジア、中南米、アフリカから13カ国14名の研修員が参加しました。

里山は石川県でのCOP10のクローゼンイベントでも大きく取り上げられ、大変注目されています。研修では能登や加賀など地域で培われてきた里山文化を基に、途上国においていかに環境や地域資源を活かした地域開発、振興を進めていくべきかを研修員が地域の方々の講義や見学での説明を通して学びました。

この研修は2011年以降も実施が予定されており、石川県から世界へ「里山(SATOYAMA)」を発信していこうと考えています。誇れる文化を石川から世界へ。みなさん、ご注目ください。



炭焼きとそれにかかわる里山の植林活動の説明を受け、持続可能な自然資源の利用について学ぶ研修員たち

Satoyama Initiative

やっぱりJICAボランティアは素晴らしい!

事業仕分けでの指摘はあるものの、現場のボランティアは今も熱いぜ!

地方自治体理解促進調査団(フィジー)

今回は北陸各県で教育にかかわっておられる方々をメンバーとしてフィジー諸島共和国で活躍する北陸出身の青年海外協力隊員、シニア海外ボランティアの活動現場を中心に訪問しました。フィジーには観光地もあり、のどかで見聞しているようなことはないように思われますが、現場には様々な課題が存在します。訪問した学校では国が重点を置いている生徒の理数科の力をいかに向上させるか、また昨年学校で必須となった情操教育をどのように手がけていけばいいのかなど、現場での課題に隊員が体ごとぶつかって取り組んでいます。



みなさん大変な中でも、いい笑顔を見せているのが印象的でした。北陸人、がんばってます。

(上)情操教育として音楽を教える協力隊員
(下)美しい島だが、まだまだ課題は残る

閉塞感を打破する一助に JICA北陸支部長 友部秀器

いつも身近にいたかつての小学校の同級生が、地区の寄合いで見かける近所のお父さんが、長くお顔を見ないなと思っていたら、真っ黒に日焼けしてなにやらわからない外国語を流暢に話している!!そして地域の活性化に向けて思いもつかないアイデアを出して積極的に取り組んでいる…。もしかしらその方たちは青年海外協力隊やシニア海外ボランティアに参加された方々かも。開発途上国・地域の発展への寄与、日本との友好親善、相互理解の深化、帰国後の社会還元目的のため、日本と価値感の異なる途上国で困難と闘いながらの活動は、誰からも高く評価されるものであり、特に昨今の日本に漂う閉塞感を打ち破る大きな力になると信じ期待しています。JICAはその事業の実施機関であることに誇りと自信を持って今後も取り組んでいきます。

協力隊OBであり、今般JICA北陸から旅立つ2人のメッセージ!!



JICA北陸を去るにあたり 市民参加協力調整員 北村哲郎

1985年に青年海外協力隊員としてJICAと初めて関わってから、早26年の歳月が経ちました。JICA事業への風当たりは年々強くなってきていますが、実際に関わったものとして、ODA事業は無駄どころか「情けは人の為ならず」だと、今回の大震災での海外からの支援を見て改めて強く感じました。今回JICA北陸を去りますが、JICAサポーターとして、引き続き何らかの形で関わっていきたくと思っています。北陸地方のみなさん、2年間ありがとうございました。



市民レベルの国際理解を ボランティア担当 加藤 秀一

事業仕分けによって多くの課題をいただいたものの、市民のみなさんからは逆に励ましのメッセージをたくさんいただきました。JICAボランティアは、多くの途上国において日本のファン、日本人のよき理解者を増やしてきました。市民レベルの国際理解は「国際平和構築」には欠かせません。やっぱり、協力隊は素晴らしい!!

行動

～地球の仲間のために、私たちができること～

JICA国際協力中学生・高校生 エッセイコンテスト2010

コンテスト概要

本エッセイコンテストは全国の中学生・高校生を対象に開発途上国の現状と国際協力の必要性への理解を深め、国際社会で日本人がどう行動すべきかを考える目的で実施しています。今年で中学生の部は15回、高校生の部は49回を数え、今年度は全国から中学生の部 47,081作品、高校生の部 24,234作品が集まりました。北陸では中学生913作品、高校生367作品の応募があり、個人賞13名、学校賞4校が受賞しました。



受賞者の声



源 春風さん

石川県立金沢二水高等学校 2年

この度はJICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテストにおいて入選という評価をいただき、嬉しく思っています。エッセイにも書きました通り、私は平和への貢献という募金ほどしか経験がありません。しかし今回そんな私のエッセイが全国に進んだことにより、私自身そして同じほどの経験しかない友人たちに、平和とは、ボランティアとはなにかを改めて考える素晴らしい機会を与えていただくこととなりました。いつの日か、私や友人たちが自分自身の目で世界の現状を捉え、力を尽くせるように、これからも日々の学業に励みたいと思います。本当にありがとうございました。

※源さんは3月5日(土)、JICA地球ひろば(東京・広尾)で行われた表彰式に出席しました。

北陸地域の受賞者・受賞校の紹介

	受賞者氏名	学校名	賞名	都道府県	
個人賞	中学生の部	嶋 千瑛美	氷見市立北部中学校	独立行政法人国際協力機構 北陸支部長賞	富山県
		新出 悠	金沢錦丘中学校	佳作	石川県
		小村 柚花子	白山市立河内中学校	佳作	石川県
		大林 雅希	明倫中学校	佳作	福井県
		栗田 もも乃	鯖江中学校	佳作	福井県
	高校生の部	高田 奈於	中能登町立鹿島中学校	石川県青年海外協力隊OB会会長賞	石川県
		山本 大貴	氷見市立南部中学校	青年海外協力隊富山県OB会会長賞	富山県
		吉村 安寧	鯖江中学校	青年海外協力隊福井県OB会会長賞	福井県
		源 春風	石川県立金沢二水高等学校	入選	石川県
		二口 則子	金沢大学人間社会学域学校教育学附属高等学校	石川県青年海外協力隊OB会会長賞	石川県
学校賞	富山県立伏木高等学校		特別学校賞	富山県	
	坂井市立春江中学校		学校賞	福井県	
	福井市清水中学校		学校賞	福井県	
	高浜町立内浦中学校		学校賞	福井県	

※受賞作品はJICAホームページからご覧いただけます。来年度の応募は6月～9月頃の予定です。